第二講・文学的文章②

一題目　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

川は、幅一メートルほどの小さな流れだ。川の縁までおりていくと、空気が［A］した。

「すごく水がきれい。」と、久里がいった。

みんなは、澄んだ川の水を飲んだり、顔を洗ったりした。汗をかいていたので、冷たい水が気持ちいい。

和也は水筒を出すと、キャンプ場で入れてきた水を捨てて、川の水を入れた。

「多摩川の子どもだね。」と、四樹はいった。

少し休んで、出発した。再び、森の中の道を登っていく。

一休坂に入ったあたりから、道は急になり、①<u>四樹のペースが落ちた。少し登っては、立ちどまるようになった。</u>

「歩くのおそくするからね。四樹ちゃん、とまらないで、ゆっくり歩きつづけなきゃだめだよ。」と、久里がいった。

まだたいして登っていないうちからバテているようなのが、二郎の気にかかった。笠取山は、最後の登りが、急な山なのだ。

しばらく登った所で、小さな流れを横切った。多摩川の支流の沢だ。そこからは、沢沿いの急な坂道を登っていった。

しだいに暑くなってきた。森の木々の葉の間から、日の光がもれてくる。山に太陽が当たりはじめたのだ。四樹の足が、少しふらつくようになった。それを見て久里が、

「少し休もう。」といった。

二郎がコップをわたすと、四樹はチョロチョロの

©RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

流れから水をくんで、ごくごくと飲んだ。みんなも、次々に飲んだ。

笠取小屋に着いたのは、八時過ぎだった。小屋の前の広場に、テーブルとベンチがいくつか置いてある。

「もう、だめ。」

四樹が、ベンチにぺたんと座りこんだ。

「もう、歩けない。」と、情けない声でいう。

先を急ぎたいところだけど、また少し休んでいくことにした。こんな所に、四樹だけ置いていくってわけにはいかない。

②「ほら、ぼくら、もうこんなに高く登ったんだぜ。」

と、克ちゃんが遠くの山並みを指さした。

山々は、下のほうに見えた。

「水干までは、もうちょっとだよ。」

「多摩川の③赤ちゃん、見にいこう。」

和也と久里の言葉に、④四樹はこくんとうなずいた。

再び登っていくと、木々がまばらになり、クマザサのおいしげる平らな所に出た。真っ白い入道雲が、

B わきでている。正面には、笠取山の山頂が、こんもりと隆起*1しているのが見えた。

やがて、笠取山へ行く道と、水干に行く道との分岐*2に出た。本当なら、あまり暑くならないうちに、まっすぐ笠取山の頂上をめざしたいところだ。けれど、まだ四樹に力が残っているうちに、多摩川の最初の一滴を見せてやったほうがいいと、二郎は思った。今のようすじゃ、四樹がどこで力つきるかわからない。

久里も克ちゃんも和也も⑤同じ意見だったので、笠取山に行くルート*3からはずれ、水干に行くわき道に入っていった。

（三輪裕子『最後の夏休み』）

*１隆起＝土地などのある部分が高く盛り上がること。
*２分岐＝（道などの）分かれめになっている所。
*３ルート＝道すじ。経路。

©RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問一　□A・Bにあてはまることばとして最も適当なものを次のうちから選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア　どんよりと　　イ　ひんやりと
ウ　もくもくと　　エ　ざわざわと

A □　B □

問二　――線①「四樹のペースが落ちた。少し登っては、立ちどまるようになった」とありますが、このあと、四樹の足どりにつかれが見えてきました。そのことがはっきりとわかる一文を文中からさがし、その初めの五字を書きぬきなさい。

□□□□□

問三　――線②「ほら、ぼくら、もうこんなに高く登ったんだぜ」とありますが、こう言ったときの克ちゃんの気持ちとして最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア　こんなに高い所まで登ってこられたので、もう十分だと満足する気持ち
イ　こんなに高い所まで登ってきたんだと、自分たちのペースの速さにおどろく気持ち
ウ　つかれきってしまった四樹を、少しでもはげましたいという気持ち
エ　「もう、歩けない。」と情けない声を出した四樹に、いらいらする気持ち

□

©RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問四　――線③「赤ちゃん」とありますが、ここでは「赤ちゃん」は何を指していますか。文中から五字で書きぬきなさい。

問五　――線④「四樹はこくんとうなずいた」から感じられる四樹の気持ちとして最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア　つかれているけれど、もう少しがんばってみよう。

イ　もう少し歩けば水干に着くなんて、うれしい。

ウ　早く多摩川の赤ちゃんを見てみたい。

エ　本当にもうちょっとなのか、あやしい。

問六　――線⑤「同じ意見」とありますが、具体的にはどんな意見ですか。文中から三十七字でさがし、その初めと終わりの四字を書きぬきなさい。

～

問七　この文章では、二郎たちはどんなコースを歩いていますか。次のうちから四つ選び、順に記号で答えなさい。

ア　笠取小屋

イ　一休坂

ウ　多摩川の水干

エ　多摩川の水干に行くわき道

オ　笠取山へ行く道と水干に行く道の分岐

カ　笠取山の山頂

□→□→□→□

©RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

二題目　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

多摩川の最初の一滴は、土からしみだし、岩をつたってポタッ、ポタッと、したたり落ちていた。上には大きな岩が突き出している。何も書いてなければ、見のがしてしまいそうな、ふつうの山の斜面だった。

けれど、そこには、

『水干。多摩川の＊１源頭。最初の一滴。東京湾まで１３８㎞』

と書かれた杭が、しっかりと立っている。

「多摩川の赤ちゃんだ。」

それまで、むっつりと歩いていた四樹が、はじめて笑った。

「克ちゃん、ほら。」

といって、二郎は、リュックの中からコップを出してわたした。すると、克ちゃんは、

「ううん。」

と首をふって、いった。

「四樹ちゃん、水ためて飲みなよ。」

「そうしなよ。」と、和也もいう。

①やっと、多摩川の最初の一滴にたどりついたのだ。だれだって、すぐに飲んでみたい。でも、みんなはその役を、四樹にゆずってくれようとしていた。

久里までが、笑ってうなずいたのを見て、二郎はコップを四樹にわたした。

四樹は＊２神妙な顔で、水が落ちてくる下にコップを置いた。

一滴ずつたまっていく水を見ていた四樹が、突然目をつぶって、両手を合わせた。

「何してんだよ。」と、二郎は聞いた。

「お祈り。」と、四樹が答える。

「神さまってわけじゃないんだぞ。」

と二郎が笑うと、すぐに久里が、

「ううん。ここ水神さまがまつってあるんだって。」

といって、大きな岩の上のほうを指さした。そこには、『水神社』と書かれた石板がある。それから、

©RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

久里は、

「四樹ちゃん、何をお祈りしてるの？」と聞いた。

「またいつか、克ちゃんに会えますように……。」

②ちょっとの間、だれも口をきかなかった。やがて、克ちゃんが、

「③ぼく*3が引っこすとこ、この一滴が、ずっと流れていく東京湾のもっと先の、太平洋の海の真ん中にあるんだ。船に乗って、遊びにおいでよ。」

といった。

「うん。」

と四樹はうなずくと、コップに少したまった水を、ごくっと飲んだ。

「おいしい。」

四樹はそういって、笑った。

けれど、みんなが、一滴ずつ落ちる水をためて飲んでいるような時間は、もうなかった。久里が近くにある葉をとると、葉の一部をおさえて、小さな器のようにした。そこに、したたり落ちる水を二、三滴受けて、口に入れた。

克ちゃん、和也、二郎も、次々に葉っぱに二、三滴のしずくを落とした。舌で受けると、不思議な味がした。

多摩川のはじまりの味だ、と二郎は思った。

（三輪裕子『最後の夏休み』）

＊１源頭＝川の最初の一滴が始まる所。

＊２神妙＝すなおで、おとなしい様子。

＊３ぼくが引っこすとこ＝克ちゃんは、東京から南に約百八十キロメートルはなれた所にある伊豆諸島の三宅島に引っこすことになっている。

©RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問一　――線①「やっと、多摩川の最初の一滴にたどりついたのだ。だれだって、すぐに飲んでみたい」とありますが、「多摩川の最初の一滴」をだれがいちばん先に飲むかについて、適当でないものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア　二郎は、もうすぐ引っこしてしまう克ちゃんに飲ませてあげたいと思った。

イ　克ちゃんは、がんばって歩いてきた四樹に飲ませてあげたいと思った。

ウ　和也は、克ちゃんの意見に賛成して、四樹に飲ませてあげたいと思った。

エ　久里は、みんながまんしてまで、四樹に飲ませてあげるのはおかしいと思った。

□

問二　――線②「ちょっとの間、だれも口をきかなかった」とありますが、それはなぜだと考えられますか。最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア　いくらお祈りをしても、もう二度と克ちゃんには会えないと思い、悲しくなったから。

イ　四樹のお祈りの内容を聞いて、改めて克ちゃんと別れることを思い、さびしくなったから。

ウ　四樹のお祈りによって、多摩川の源頭に着いた喜びがうすれてしまい、腹立(はらだ)たしかったから。

エ　神さまがまつってあるかどうかも知らずにお祈りしている四樹が、かわいそうだったから。

□

©RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問三　――線③「ぼくが引っこすとこ、この一滴が、ずっと流れていく東京湾のもっと先の、太平洋の海の真ん中にあるんだ」とありますが、克ちゃんは、みんなにどんなことを伝えたいのだと考えられますか。次の□にあてはまることばを文中から九字で書きぬきなさい。

□が流れていく先の太平洋の真ん中に、自分がこれから住む島があるのだから、またみんなに会えるということ

□□□□□□□□□

問四　「水干」は、どんな場所ですか。次の□にあてはまることばを文中からそれぞれ書きぬきなさい。

一見ふつうの□□□□だが、□からしみだした水は、岩をつたってしたたり落ちていて、この水が多摩川の水となる。また、その上には□□□と書かれた石板があり、□□がまつられている。

©RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第二講　文学的文章②

一題目

問一　Ａ　イ
　　　Ｂ　ウ
問二　四樹の足が
問三　ウ
問四　最初の一滴
問五　ア
問六　まだ四樹　～　うがいい
問七　イ→ア→オ→エ

二題目

問一　エ
問二　イ
問三　多摩川の最初の一滴
問四　山の斜面・土・水神社・水神

Ⓒ RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。